

雜筆

芥川龍之介

青空文庫

竹田 ちくでん

竹田 ちくでん は善 よ き人なり。ロオランなどの評価を学べば、善 よ き画描 えが
 き以上の人なり。世にあらば知りたき画描 えが き、大雅 たいが を除けばこの
 人だと思ふ。友だち同志なれど、山陽 さんやう の才子ぶりたるは、竹田
 より遙 しなぐだ に品下 しなぐだ れり。山陽が長崎に遊びし時、狭斜 けふしや の遊 いう あるを疑
 はれしとて、「家有 いへにかういありわがかへるをまつ 綺衣 きい 待 まち 吾返 ごきんみづのごとくすでにさんね、孤衾 こきん 如水 みづ 已 や 三
 年 さん」など云へる詩を作りしは、聊眉 いささか に唾 つば すべきものなれど、竹 ちく
 田 でん が同じく長崎より、「不上 しゆかくにのぼらず 酒閣 かくわんをかはずつぐなふ、不買 くわい 歌 か 鬟 わん 償 ちやう、周 しう
 文 ぶん 画 のぐわ、筆頭 ひつとうのみづ 水 みづ、墨余 ぼくよのやま 山 ことば」の詞を寄せたるは、恐らく真

情を吐露せしなるべし。竹田は詩書画三絶を称せられしも、和歌などは巧ならず。画道にて悟入せし所も、三十一文字の上にはいつかうき向利き目がないやうなり。その外香や茶にも通ぜし由なれど、その道の事は知らざれば、何ともわれは定め難し。面白きは竹田が茸の画を作りし時、頼みし男仏頂面をなしたるに、竹田「わが苦心を見給へ」とて、水に浸せし椎茸を大籠に一杯見せたれば、その男感歎してやみしと云ふ逸話なり。竹田が刻意励精はさる事ながら、俗人を感じさせるには、かう云ふ事にまさるものなし。大家の苦心談などと云はるる中、人の悪き名人が、凡下の徒を翻弄する為に仮作したものも少くあるまい。山陽などはどうもやりさうなり。竹田になるとそんな悪戯気は、嘘にも

あつたとは思はれず。返す返すも竹田は善き人なり。「田能村竹田」と云ふ書を見たら、前より此の人が好きになつた。この書は著者大島支郎氏、おほしましろう 売る所は豊後国大分ぶんごのくに おほいたの本屋忠文堂ちうぶんだう（七月二十日）

奇聞

大阪の或る工場こうじやうへ出入でいりする辨当屋の小娘あり。職工の一人ひとり、その小娘の頬ほほを舐なめたるに、忽ち発狂したる由。
アメリカの何処どこかの海岸なり。海水浴の仕度したくをしてゐる女、着物アメリを泥棒に盗まれ、一日近くも脱衣場から出る事出来ず。その後のち

泥棒はつかまりしが、罪名は女の羞恥心しうちしんを利用したる不法檻ふはふかんぎ禁罪んざいなりし由。

電車の中で老婦人に足を踏まれし男、忌々いまいましければ向うの足を踏み返したるに、その老婦人忽ち演説を始めて曰いはく、「皆さん。この人は唯今私が誤まつて足を踏んだのに、今度はわざと私の足を踏みました。云々うんぬん」と。踏み返した男、とうとう閉口へいこうしてあやまりし由。その老婦人は矢島楯子女史か何かの子分ならん。世の中には嘘のやうな話、存外ぞんぐわいあるものなり。皆小穴一をあないちい遊亭うていに聞いた。(七月二十三日)

又猿ざる蓑みのを読む。芭蕉ばせをと去来きよらいと凡兆ぼんてうとの連句の中には、波
瀾老成の所多し。就なかなづく中なこんな所は、何なんとも云へぬ心もちにさ
せる。

ゆかみて蓋ふたのあはぬ半櫃はんびつ
草庵さうあんに暫く居ては打うちやふり
いのち嬉せしき撰集せんじふのさた

来らい蕉せを兆てう

芭蕉が「草庵ひらめに暫く居ては打やふり」と付けたる付け方、徳とくさ
山の棒が空ひらめに閃くやうにして、息もつまるばかりなり。どこか
らこんな句を拈ねんして来るか、恐しと云ふ外ほかなし。この鋭さの前に
は凡兆いへどと雖も頭あがが上るかどうか。

凡兆と云へば下の如き所あり。

昼ねふる青鷺あをさぎの身のたふとさよ 蕉

しよろしよろ水に藺ゐのそよくらん 兆

これは凡兆ぼんてうの付け方、未いまだしきやうなり。されどこの芭蕉の句

は、なかなか世間並なみの才人が筋斗百回した所が、付きんけられさうもないには違ひなし。

たつた十七字の活殺なれど、芭蕉ばせをの自由自在には恐れ入つてし

まふ。西洋の詩人の詩などは、日本人故わからぬせゐか、これ程えらいと思つた事なし。まづ「成程」なるほどと云ふ位な感心に過ぎず。

されば芭蕉のえらさなども、いくら説明してやつた所が、西洋人にはわかるかどうか、疑問の中の疑問なり。うち（七月十一日）

蜻蛉

蜻蛉^{とんぼ}が木の枝にとまつて居^ゐるのを見る。羽根^{はね}が四枚^{よたひら}平に並んでゐない。前の二枚が三十度位あがつてゐる。風が吹いて来たら、その羽根で調子を取つてゐた。木の枝は動けども、蜻蛉は去らず。その儘悠々と動いて居る。猶^{なほ}よく見ると、風の吹く強弱につれて、前の羽根の角度が可^{かなり}成いろいろ変る。色の薄い赤蜻蛉。木の枝は枯枝。見たのは崖^{がけ}の上なり。（八月十八日青根温泉にて）

子供

子供の時分の事を書きたる小説はいろいろあり。されど子供が感じた通りに書いたものは少し。大抵たいていは大人おとなが子供の時を回顧して書いたと云ふ調子なり。その点では James Joyce が新機軸を出したと云ふべし。

ジョイスの A Portrait of the Artist as a Young Man は、如何いかにも子供が感じた通りに書いたと云ふ風なり。或は少し感じた通りに書き候さくらふと云ふ気味があるかも知れず。されど珍品は珍品なり。こんな文章を書く人は外ほかに一人ひとりもあるまい。読んで好いい事をしたりと思ふ。(八月二十日)

十千万堂日録

とちまんだうにちろく

十千万堂日録

一月二十五日の記に、

紅葉こうえふが諸弟子しよでしと芝蘭簿しらんぼ

の記入を試むくだり条あり。風葉ふうえふは「身長今一寸いつすん」を希望とし、春

ゆんえふ

葉は「四十迄生きん事」を希望とし、紅葉は「欧洲大陸にマ

アブルの句碑を立つ」を希望とす。更に又春葉は書籍に西遊さいいうき記

を挙げ、風葉は「あらゆる字引類」を挙げ、紅葉はエンサイクロ

ピディアを挙ぐ。紅葉の好み、諸弟子しよでしに比ぶれば、頗西洋すこぶるかぶれ

の気味あり。されどその嫌味なる所に、返つて紅葉の器量の大が

窺うかがひ知られるやうな心もちがする。

それから又二十三日の記に、「此夜よ(八)の八を草して黎明れいめい

に至る。終に脱稿せず。たうときものは寒夜の炭。」とあり。何
 となく嬉しきくだりなり。(八)は金色夜叉の(八)。(八月
 二十一日)

隣室

「姉さん。これ何？」

「ゼンマイ。」

「ゼンマイ珈琲つてこれから拵へるんでせう。」

「お前さん莫迦ね。ちつと黙つていらつしやいよ。そんな事を云
 つちや、私がきまり悪くなるぢやないの。あれは玄米珈琲よ。」

姉は十四五歳。妹は十二歳の由。この姉妹しまいふたり二人ともスケッチ・ブツクを持つて写生に行く。雨降りの日は互に相手の顔を写生するなり。父親は品ひんのある五十がつかう恰好がつかうの人。この人も画ゑの嗜たしなみありげに見ゆ。（八月二十二日青根温泉にて）

若さ

木米もくべいは何時いつも黒羽二重くろはぶたへづくめなりし由。これ贅ぜいたく沢たくに似て、反かへつて徳用とくようなりと或人云へり。その人又云ひしは、されどわれら若きものは、木米もくべいの好みの善きことも重々承知はしてゐれど、黒羽二重づくめになる前に、もつといろいろの事をして見たい気

ありと。この言葉はそつくり小説を書く上にも当て嵌るやうなり。
 どう云ふ作品が難^{ありがた}有きか、そんな事は臃^{おぼろ}げながらわかつてゐれ
 ど、一図^{いちづ}にその道へ突き進む前に、もつといろいろな行き方へも
 手を出したい氣少からず。こは儉^{とうあん}安と云ふよりも、若きを恃^{たの}む
 心もちなるべし。この心もちに安住するは、余り善^よい事ではない
 かも知れず、云はば芸術上の蕩^{たうし}子ならんか。（八月二十三日）

痴情

男女の痴情^{ちじやう}を写^{しやじん}尽せんとせば、どうしても房^{ばう}中^{ちゆう}の事に及
 ばざるを得ず。されどこは役人の禁ずる所なり。故に小説家は最

も迂遠な仄筆そくひつを使つて、やつと十の八九を描く事となる。金きんべ瓶梅いばい ここんが古今無双の痴情小説たる所以ゆゑんは、一つにはこの点でも無遠慮に筆を揮つた結果なるべし。あれ程でなくとも、もう少し役人がやかましくなければ、今より数等深みのある小説が生まれるならん。

金瓶梅程の小説、西洋に果してありや否や。ピエル・ルイのAphroditeなども、金瓶梅に比ぶれば、子供の玩具おもちゃも同じ事なり、尤も後者は序文にある通り、楽欲主義げうよくしゆぎと云ふ看板もあれば、一概に比ぶるは不都合ふつがふなるべし。（八月二十三日）

竹

うしろ
 後の山の竹藪を遠くから見ると、暗い杉や檜の前に、房々し
 た緑が浮き上つて居る。まるで鳥の羽毛のやうになり。頭の中で
 こしら 幽 篁 とか何とか云ふ氣はしない。支那人は竹が風に吹
 かるるさまを、竹笑と名づける由、風の吹いた日も見てゐたが、
 一 向竹笑らしい心もち起らず。又霧の深い夕方出て見たら、皆
 ぼんやり黒く見える所、平凡な南画じみてつまらなかつた。それ
 より竹藪の中にはひり、竹の皮のむけたのが、裏だけ日の具合で
 光るのを見ると、其処らに蛞蝓が這つてゐさうな、妙な無氣味
 さを感じるものなり。（八月二十五日青根温泉にて）

貴族

貴族或は貴族主義者が思ひ切つてうぬぼれられないのは、彼等も亦またわれら同様、厠かはやに上る故なるべし。さもなければ何処どこの国でも、先祖は神々のやうな顔をするかも知れず。徳川時代の大諸侯だいしよくは、参観さんかん交代かうたいの途次とじ旅宿りよしゆくへとまると、必大かならず恭いさようは砂づめの樽たるへ入れて、後あとへ残さぬやうに心がけた由。その話を聞かされたら、彼等もこの弱点には氣づいてゐたと云ふ氣がしたり。これをもつと上品に云へば、ニイチエが「何故人なぜは神だと思はないかと云ふと、云々うんぬん」の警句と同じになつてしまふだらう。（八月二十六日）

井月

信州伊那の俳人に井月と云ふ乞食あり、拓落たる道情、
良寛に劣らず。下島空谷氏が近来その句を蒐集してゐる。

「朝顔に急がぬ膳や残り客」 「ひそひそと何料理るやら梔明り」

「初秋の心づかひや味噌醬油」 「大事がる馬の尾つつや秋の風」

「落栗の座をさだむるや窪たまり」 （初めて伊那に来て） 「鬼

灯の色にゆるむや畑の縄」等、句も天保前後の人にしては、

思ひの外好い。辞世は「何処やらで鶴の声する霞かな」と云ふ由。
憾むらくはその伝を詳にせず。唯犬が嫌ひだつたさうだ。（九月

十日)

百日紅

自分の知れる限りにては、葉の黄ばみそむる事、桜より早きは
 なし。ゑんじゆ 槐これに次ぐ。その代り葉の落ち尽す事早きものは、百さるす
べり 日紅第一なり。桜や槐の梢にはまだ疎こずゑに残葉まばら ざんえふがあつても、百
 日紅ばかりは坊主ぼうずになつてゐる。梧桐あをぎり、芭蕉ばせう、柳など詩や句に
えうらく 揺落を歌はるるものは、みな思ひの外散ほかる事遅し。一いつたい体百日
 紅と云ふ木、春も新緑の色あまね治あまき頃にならば、容易に赤い芽を吹か
ながつかたかし ず。長塚節はるさめ氏の歌に、「春雨になまめきわたる庭ぬちにお

ろかなりける 梧桐あをぎりの木か」とあれど、梧桐の芽を吹くは百日紅よりも早きやうなり。朝寝も好きなら宵寝も好きなる事、百日紅の如きは滅多めったになし。自分は時々この木の横着なるに、人間同様腹を立てる事あり。(九月十三日)

大作

亀尾君かめを訳エツケルマンのゲエテ語録の中に、少壮の士の大作を成すは労多くして功少きを戒めてやまざる一段あり。蓋けだしゲエテ自身フアウストなどを書かんとして、懲こり懲こりした故なるべし。思へばトルストイも「戦争と平和」や「アンナ・カレニナ」の大成

に没頭せしかば、遂には全欧九十年代の芸術がわからずなりしならん。勿論他人の芸術がわからずとも、トルストイのやうな堂々たる自家じかの芸術を持つてゐれば、毛頭まうとう差支さしつかへはなきやうなり。されどわかるわからぬの上より云へば、芸術論を書きたるトルストイは、寧ろ憐むべき鑑賞眼の所有者たりし事は疑ひなし。まして我々下根げこんの衆しゅ生じやうは、好い加減な野心に煽動せんどうされて、柄がらにもない大作にとりかかったが最期さいご、虻蜂あぶはちとらずの歎たんを招くは、わかり切つた事かも知れず。とは云ふものの自分なぞは、一旦大作を企つべき機縁が熟したと思つたら、ゲエテの忠告も聞えぬやうに、忽たちまちいきり立つてしまひさうな氣がする。（九月二十六日）

水怪

河童^{かつば}の考証は柳田^{やなぎだ}国男^{くにを}氏の山島^{さんたう}民譚^{みんたん}集^{しふ}に尽してゐる。御^ご維新^{あしん}前^{ぜん}は大根^{だいこん}河岸^{がし}の川にもやはり河童^{くわんぜじん}が住んでゐた。観世^{くわんぜじん}新^{しん}路^ろの経師^{きやうじや}屋^{みち}があ^だの川へ障子^{むやみ}を洗^うひに行つてゐると、突然^{うしろ}後^ごより抱^だきつきて、無暗^{むやみ}にくすぐり立てるものあり。経師^{きやうじや}屋^{みち}閉口^{へいこう}して、仰^{あふむ}向け^むに往^{わう}来^{らい}へころげたら、河童^{かどう}一匹^{いつぱく}背中^{せいちゆう}を離^{はな}れて、川^{かわ}へどぶんと飛^とびこみし由^{よしゆ}、幼時^{ようじ}母^{はは}より聞^ききし事^{こと}あり。その後^{のち}万^{まん}年^{ねん}橋^{はし}の下^{した}の水^{みづ}底^{そこ}に、大^{おほ}緋^ひ鯉^ぎがゐると云^いふ噂^{うはさ}ありしが、どうなつたか詳^{あづま}しくは知^しらず。父^{ちち}の知^し人^{ひと}に夜^よ釣^つりに行^いつたら、吾^{われ}妻^{つま}橋^{はし}より少^{せう}し川^{かわ}上^{かみ}で、大^{おほ}きなすつぽんが船^{ふね}のともへ、乗^のりかか

を見たとき云ふ人あり。そのすつぽんの首太き事、鉄瓶の如しと話してゐた。東京の川にもこんな水すゐ怪多し。田舎ゐなかへ行つたら猶なほの事、未いまだに河童が芦あしの中で、相撲すまふなどどつてゐるかも知れない。たまにまづいてい偶一遊亭しる作る所の河太郎独酌之図かはたらうどくしやくのづを見たから、思ひ出した事を記しとどめる。(九月三十日)

器量

天龍寺てんりゅうじの峨山がさんが或雪後の朝、晴れた空を仰ぎながら、「昨日きのふはあんなに雪を降らせた空が、今朝けさはこんなに日がさしてゐる。この意気でなくては人間も、大きな仕事は出来ないな」と云ひし

由。今夜それを読んだら、叶かなはない気がした。僅わずか百枚以内の短篇を書くのに、悲喜交至こもこもつてゐるやうでは、自分ながら気の毒千万なり。この間あひだも湯にはひりながら、湯にはひる事その事は至極簡単なのに、湯にはひる事を書くとなると中々容易でないのが不思議だった。同時に又不愉快だった。されど下根げこんの衆しゅじやう生せいと生まれたからは、やはり辛抱しんぱう專一に苦勞する外はあるまいと思ふ。

(十月三日)

誤謬

Ars longa, vita brevis を訳して、芸術は長く人生は短しと云ふは

好^よい。が、世俗がこの句を使ふのを見ると、人亡^わべども業^あ顕^らると
 云ふ意味に使つてゐる。あれは日本人或は日本の文士だけが独り
 合^が点^{てん}の使ひ方である。あのヒポクラテエスの第一アフォーリズムに
 は、さう云ふ意味ははひつて居らぬ。今の西^{せいじん}人がこの句を使ふ
 のも、やはりさう云ふ意味には使つて居らぬ。芸術は長く人生は
 短しとは、人生は短い故刻苦精励を重ねても、容易に一芸を修め
 る事は出来ぬと云ふ意味である。こんな事を説き明かすのは、中
 学教師の任かも知れぬ。しかし近頃は我々に教へ顔をする批評家
 の中にさへ、このはき違へを知らずにゐるものもある。それでは
 文壇にも気の毒なやうだ。そんな意味に使ひたくば、希^{ギリ}臘^{シヤ}の哲
 人の語を借らずとも、孫^{そんくわてい}過庭^{なぞ}に人^{ひと}亡^{ほろ}業^{べども}顕^わあらはる^{うんぬん}云々

の名文句が残つてゐる。序ついでながら書いて置くが、これからの批評家は、「ランダアやレオパルデイのイマジナリイ・コムヴァアセエシヨン」などと出たらめの氣焔を挙げてゐてはいけぬ。そんな事ではいくら威張つても、術げんかく学がくの名にさへ価せぬではないか。徒いたづらに人に教へたがるよりは、まづ自ら教へて来るが好い。よ(十月五日)

不朽

人命べに限りあればとて、命を粗末そまつにして好いとは限らず。なる可く長生をしようとするのは、人各々の分別なり。芸術上の作品

も何時かは亡ぶのに違ひなし。画力ぐわりよくは五百年、書力しよりよくは八
 百年とは、王世貞わうせうてい既にこれを云ふ。されどなる可く長持ちのす
 る作品を作らうと思ふのは、これ亦我々の随意なり。かう思へば
 芸術の不朽を信ぜざると、後世に作品を残さんとするとは、格別
 矛盾むじゆんした考へにもあらざるべし。さらば如何いかなる作品が、古く
 ならずにあるかと云ふに、書や画ぐわの事は知らざれども、文芸上の
 作品にては簡潔かんけつなる文体が長持ちのする事は事実なり。勿論文
すなはち体即作品と云ふ理窟なければ、文体さへ然らばその作品が常あらたに新
 なりとは云ふべからず。されど文体が作品の佳否かひに影響する限り、
 絢爛けんらん目を奪ふ如き文体が存ぞんぐわい外古くなる事は、殆ほとんど
 し。ゴオテイエは今日こんにち読むべからず。然れどもメリメエは日に

新なり。^{あらた}これを我朝の文学に見るも、^{おうぐわい}鷗外先生の短篇の如き、

それらと同時に発表されし「冷笑」「うづまき」等の諸作に比ぶ

れば、今猶清新の氣に富む事、昨日校正を済ませたと云ふとも、

差支^{さしつか}へなき位ならずや。ゾラは嘗^{かつて}文体を学ぶに、ヴォルテールの

簡^{かん}を宗^{むね}とせずして、ルツソオの華^{くわ}を宗^{むね}とせしを歎き、彼自身の

小説が早晩古くなるべきを予言したる事ある由、善^{おのれ}く己を知れり

と云ふべし。されど前にも書きし通り、文体は作品のすべてにあ

らず。文体の如何^{いかん}を超越したる所に、作品の永続性を求むれば、

やはりその深さに帰着するならん。「凡そ事物の能く久遠^{くをん}に垂る

る者は、（中略）切実の体^{たい}あるを要す」（芥舟学画編^{かいしゅうがくぐわへん}）とは、

文芸の上にも確論だと思ふ。（十月六日）

流俗

思ふに流俗なるものは、常に前代には有用なりし真理を株守^{しゅしゅ}する特色あり。^{もつと}尤も一時代前^{ぜん}、二時代前、或は又三時代前と、真理の古きに從つて、いろいろの流俗なきにあらず。さらば一時代の長さ^{いくばく}幾^{いくばく}何かと云へば、これは時と処とにより、一概には何年と定め難し。まづ日本ならば一時代約十年とも申すべきか。而^{しか}して普通流俗が学問芸術に害をなす程度は、その株守する真理の古さと逆比例するものなり。たとへば武士道主義者などが、今日^{こんにち}子供の悪^{いたづら}戯程も時代の進歩を害せざるは、この法則の好例なる

べし。故に現在の文壇にても、人道主義の陣笠連は、自然主義の陣笠連より厄介物たるを当然とす。（十月七日）

木犀もくせい

牛込うしごめの或町を歩いてゐたら、誰の屋敷か知らないが、黒堀くろべいの続いてゐる所へ出た。今にも倒れてしまひさうな、ひどく古い黒堀だつた。堀の中には芭蕉ばせうや松が、凭もたれ合ふやうに一杯茂つてゐた。其処そこを独り歩いてゐると、冷たい木犀もくせいの匂におひがし出した。何だかその匂が芭蕉や松にも、滲しみみ透とほるやうな心もちがした。すると向うからこれひとりも一人、まつすぐに歩いて来る女があつた。や

がて側へ来たのを見たら、何処かで見たとやうな顔をしてゐた。すれ違つた後でも考へて見たが、どうしても思ひ出せなかつた。が、何だか風流な気がした。それから賑な往来へ出ると、ぽつぽつ雨が降つて来た。その時急にさつきの女と、以前遇つた所を思ひ出した。今度は急に下司な気がした。四五日後折柴と話してゐると、底に穴を明けた瀬戸の火鉢へ、縁日物の木犀を植ゑて置いたら、花をつけたと云ふ話を聞かせられた。さうしたら又牛込で遇つた女の事を思ひ出した。が、下司な気は少しもなかつた。

(十月十日)

サムエル・バトラアの説に云ふ。「モリエルが無智の老嫗らううに自作の台本を読み聞かせたと云ふは、何も老嫗らううの批評を正しとしたのではない。唯自ら朗読する間に、自ら台本の瑕疵かしを見出すが為である。かかる場合聴き手を勤むるものは、無智の老嫗らううに若くも「あひだのはあるまい」と。まことに一理ある説である。白居易はくきよなどが老嫗に自作の詩を読み聴きかせたと云ふのも、同じやうな心があつたのかも知れぬ。しかし自分がバトラアの説を面白しとするのは、ただ啻に一理あるが故のみではない。この説はバトラアのやうに創作の経験がある人でないと、道破されさうもない説だからである。なるほど成程世のつねの学者や批評家にも、モリエルの喜劇はわかるか

も知れぬ。が、それだけでは立ちどころに、バトラアの説が吐^はけるものではない。こんな消^{せう}息^{そく}に通じるには、おのれの中^{うち}にモリエルその人を感じてゐなければ駄^だ目である。其^{そこ}処^こが自分には難^{ありが}有^たい気がする。ロダンの手記なぞが尊いのも、かう云ふ所が多い故だ。二千里外に故人の面^{おもて}を見ようと思つたら、どうしても自^{みづか}ら苦まねばならぬ。(十月十九日)

今夜

今夜は心が平かである。机の前にあぐらをかきながら、湯に溶^とかしたブロチンを啜^{すす}つてゐれば、泰^{たい}平^{へい}の民の心もちがする。か

う云ふ時は小説なぞ書いてゐるのが、あさましいやうにも考へられる。そんな物を書くよりは、発句ほつくの稽古けいこでもしてゐる方が、余よ程養生になるではないか。発句より手習ひでもしてゐれば、もつと事が足りるかも知れぬ。いや、それより今かうして坐つてゐる心もちがその儘難ありがた有あいのを知らぬかなぞとも思ふ。おれは道だうし書よも仏書ぶつしよも読んだ事はない。が、どうもおれの心の底には、虚無の遺伝が潜んでゐるやうだ。西洋人がいくらもがいて見ても、結局はカトリツクの信仰に舞ひ戻るやうに、おれなぞはだんだん年をとると、隠棲いんせいか何かがしたくなるかも知れない。が、まだ今のやうに女に惚ほれたり、金が欲しかつたりしてゐる内は、到底たうて底思いひ切つた真似は出来さうもないな。尤もつとも仙人せんじんと云ふ中に

は、祝鷄翁しゆくけいをうのやうな蓄産家や郭璞くわくぼくのやうな漁色家ぎよしよくかがある。ああ云ふ仙人にはすぐになれさうだ。しかしどうせなる位なら、俗な仙人にはなりたくない。横文字の読める若隠居なぞは、猶なほさら更おれは真平御免まつびらごめんだ。そんなものよりは小説家の方が、まだしも道に近いやうな気がする。「尋仙せんをたづねて未向いまだむかは碧山はきざんの行かう住すん在人間じんかん足道情あるもだうじやうたる」かな。何なんだか今夜は半可通はんかつうな独り語ごばかり書いてしまった。(十月二十日)

夢

世間の小説に出て来る夢は、どうも夢らしい心もちがせぬ。大た

抵^{いて}は作為^{さくゐ}が見え透くのである。「罪と罰」の中の困馬^{こんば}の夢でも、

やはりこの意味ではまことらしくない。夢のやうな話なぞと云ふが、夢を夢らしく書きこなす事は、好^{いい}い加減な現実の描^{べう}写^{しや}より

も、反^{かへ}つて周到な用意が入る。何^{なぜ}故かと云ふと夢中の出来事は、

時間も空間も因果の關係も、現実とは全然違つてゐる。しかもそ

の違ひ方が、到^{たうてい}底^{てい}型^{けい}には嵌^はめる事が出来ぬ。だから實際見た夢

でも写さない限り、夢らしい夢を書く事は、殆^{ほとんど}不可能と云ふ外は

ない。所が小説中夢を道具に使ふ場合は、その道具の目的を果す

必要上、よくよく都合^{つがふ}の好^{いい}い夢でも見ねば、實際見た夢を書く^{わけ}訣^け

に行^ゆかぬ。この故に小説に出て来る夢は、善^よく行つた所がドスト

エフスキイの困馬の夢を出^で難^{がた}いのである。しかし實際見た夢から、

逆に小説を作り出す場合は、その夢が夢として書かれて居らぬ時でも、夢らしい心もちが現れる故、往々神秘的な作品が出来る。

名高い自殺倶楽部クラブの話なでも、ステイヴンソンがあの落想らくさうを得

たのは、誰かが見た夢の話からだと云ふ。この故にさう云ふ小説を書かうと思つたら、時々夢を記して置くが好よい。自分なぞはそれも怠てうつてゐるが、ドオデエには確か夢の手記があつた。わが朝てうでは志賀直哉しがなほや氏に、「イツク川」と云ふ好小品がある。（十月二十五日）

日本画の写実

日本画家が写実にこだはつてゐるのは、どう考へても妙な気がする。それは写実に進んで行つても、或程度の成功を収められるかも知れぬ。が、いくら成功を収めたにしても、洋画程写実が出来る筈はない。光だの、空気だの、質量だのの感じが出したかつたら、何故なぜさきにパレットを執とらないのか。且又さう云ふ感じを出さうとするのは、印象派が外光の効果を出さうとしたのとは、余程趣よほどむきちがが違つてゐる。仏人ふつじんは一步先へ出たのだ。日本画家が写実はやみぎよしにこだはるのは、一步横へ出ようとするのだ。自分は速水御舟うまひこ氏の舞妓まひこの画ゑなぞに対すると、如何いかにも日本画に氣の毒な氣がする。昔芳幾よしいくが描かいた写真画と云ふ物は、あれと類を同じくしてゐたが、求める所が鄙俗ひぞくなだけ、反かへつてあれ程嫌味いやみはない。

甚^{はなは}失礼な申し分ながら、どうも速水氏や何かの画を作る動機は、
 存^{ぞんぐわい}外^{がい}足もとの浮いた所が多さうに思はれてならぬのである。

(十一月一日)

理解

一時は放蕩^{はうたう}さへ働けば、一かど芸術がわかるやうに思ひ上^{あが}つた連中がある。この頃は道義と宗教とを談ずれば、芭蕉^{ばせを}もレオナルド・ダ・ヴィンチも一呑^{ひとの}みに呑みこみ顔をする連中がある。ヴィンチは兎^とも角^{かく}も、芭蕉さへ一通り偉さがわかるやうになるのは、やはり相当の苦勞を積まねばならぬ。ことによると末世^{まつせ}の我々に

は、死身しにみに思ひを潜ひそめた後のちでも、まだ会得えとくされない芭蕉の偉さが残つてゐるかも知れぬ位だ。ジアン・クリストフの中に、クリストフと同じやうにベエトオフエンがわかると思つてゐる俗物を書いた一節がある。わかれると云ふ事は世間が考へる程、無造作むざうさに出来る事ではない。何事も芸道に志したからは、わかつた上にもわからうとする心がけが肝腎かんじんなやうだ。さもないと野狐やこに墮おしてしまふ。偶電気たまたまと文芸所載の諸家の芭蕉論の中に、一二孟浪杜まらんづぎ撰けんの説を見出した故に、不平のあまり書きとどめる。(十一月四日)

茶釜の蓋置き

今日けふかとりほづま香取秀真氏の所にゐたら、茶釜の蓋ふた置きを三つ見せてくれ
 た。小さな鉄てつの五徳ごとくのやうな物である。それが三つとも形が違ふ。
 違ふと云つた所が五徳同様故、三本の足くわんと環との釣合わづかひが、僅に
 違つてゐるに過ぎない。が三つとも明らかに違ふ。見てゐれば見
 てゐる程いよいよ愈違ひが甚しい。一つは莊重な心もちがする。一つは氣
 の利きいた、洒脱しやだつな物である。最後の一つは見るに堪へぬ。これ
 程簡単な物にもこれ程出来の違ひがあるかと思つたら、何事も芸
 道は恐しい氣がした。一刀一擲の心もちが入るのは、仏ほとけを刻む時
 ばかりでないと云ふ氣がした。名人の仕事に思ひ比べれば、我々
 の書き残した物なぞは、悉ことごとく焚燒ふんせうしても惜しくはないと云ふ氣が

した。考へれば考へる程、愈底いよいよの知れなくなるものは天下に芸道唯一つである。（十一月十日）

西洋人

茶碗ちやわんに茶を汲くんで出すと、茶を飲む前にその茶碗を見る。これは日本人には家常茶飯かじやうさはんに見る事だが、西洋人は滅多めったにやらぬらしい。「結構な珈琲コオヒー茶碗でございます」などと云ふ言葉は、西洋小説中にも見えぬやうである。それだけ日本人は芸術的なのかも知れぬ。或はそれだけ日本人の芸術は、細こまい所にも手がとどくのかも知れぬ。リイチ氏などは立派りっぱな陶工だが、皿や茶碗の仕

事を見ると、裏には心がはひつて居らぬやうだ。これなぞも誰か注意さへすれば、何でもな^{なん}い事だとは云ふものの、其^{そこ}処に争はれぬ西洋人を感じずるやうな心もちがする。（十一月十日）

粗密と純雑

粗密^{そみつ}は氣質の差によるものである。粗を嫌ひ密を喜ぶのは、各^{おのおの}好む所に従ふが好^よい。しかし粗密と純雑とは、自^{おのづか}ら又異つてゐる。純雑は氣質の差のみではない。更に人格の深处に根ざした、我々が一生の一大事である。純を尊び雑^{いやし}を卑むのは、好^{かうを}悪の如何^{いかに}を超越した批判^{ひはん}の沙汰^{さた}に移らねばならぬ。今夜ふと菊池寛著す所の

「極樂」を出して見たが、菊池の小説の如きは粗とは云へても、

終始雜俗の氣には汚れてゐない。その証拠には作中の言葉が、善

かれ悪しかれ満ちてゐる。唯一不二の言葉ばかり使つてないにし

ろ、白痴脅しの言葉は並んでゐない。あれはあれなりに出来上つ

た、他に類のない小説である。その点では一二の大家先生の方が、

遙に雜俗の屎臭を放つてゐると思ふ。粗密は前にも書いた通り、

氣質の違ひによるものである。だから鑑賞の上から云へば、

菊池の小説を好むと好まざるとは、何人も勝手に声明するが好

い。しかしその芸術的価値の批判にも、粗なるが故に許し難いと

するのは、好む所に偏するの譏を免れぬ。同時に又創作の上から

云へば、菊池の小説は菊池の氣質と切り離し難い物である。あの

粗は決して等閑なほざりに書き流した結果然るのではない。その故に他の作家、殊に本来密を喜ぶ作家が、妄みだりに菊池の小説作法を踏襲たふしふしたら、勢いきほひ雑俗の病へいに陥おちいらざるを得ぬ。自分なぞは氣質の上では、可也かなり菊池と隔へだたつてゐる。だから粗密の好みを云へば、一致しない点が多いかも知れぬ。が、純雑を論ずれば、必しも我等は他人ではない。（十一月十二日）

（大正九年）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

雑筆

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>